



Title	日本画……19世紀末の一様相……：中川重麗研究の一端
Author(s)	榎原, 吉郎
Citation	デザイン理論. 2005, 47, p. 130-131
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53272">https://doi.org/10.18910/53272</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 日本画……19世紀末の一様相……

## — 中川重麗研究の一端 —

榎原吉郎／京都市美術館嘱託

近年、重麗研究が進展し、彼が選び出した原著者のユストゥス・ブリンクマンも、19世紀末から20世紀初頭のドイツの日本美術の受容に重要な役割を果たした人物であることが明らかにされている<sup>1</sup>。

明治27年1月から12月まで10回に亘って、京都美術協会雑誌に掲載された。（4・5月は休載、理由は不明）第1回から6回まで、題名が「日本画の評」とされ、7回以後、（絵具を論じ次に席上揮毫に及ぶ）、（席上揮毫を見ての驚き及び骨法）、（画術と書法と相似たる事）、（日本人は配色の名人なり）という副題が付く。付けたのが訳者か、編集者かは不明。

重麗は、著者を「ユストゥス・ブリンクマン」、「独逸ハンブルグの博物館長」、書名を「日本の技術及手藝」とし、「日本の美術工藝」を論じた「新著述」の中から「絵画の一部を抄訳したもの」である、と記す。原本は「序言・自然・植物・動物・人種・住居・宗教・造園・建築・民族衣装・武具・技術全般・絵画・印刷技術」である。抄訳部分は、総頁294頁中、絵画部門53頁の前半である。原本は日本文化研究センターに収蔵されている。優れた写真製版の技術が示され「ジロッタージュ」と称された亜鉛版印刷の技法が活用されている。1889年ベルリンのワグナーから出版した「Kunst und Handwerk in Japan」「日本に於ける美術と手工芸」である。ブリンクマンは来日していないが、じつに種々の情報を入手して論述している。ブリンクマンは〔日本画工の想と欧洲画工の想と多くの着眼に於て遠く相庭逕す〕と、「想」<sup>2</sup>の差異を

指摘し、差異があるのであるから〔同一の批評的尺度を此二人種の美的本性が作り出せる美術〕に下してはならない、とする。「想」の差異とは、日本の「画術」が〔今は既に亡滅したる技術〕であり、〔科学を基礎として組立てたる当世の欧羅巴の技術<sup>3</sup>〕とは大きく異なる、と考えた。陰影法、遠近法、解剖学を度外視しているのが、〔我々に美の宝物と愉快なる思想とを発見し、幕を除きて眼の前に聳えしめたることを、蓋し此の美と愉快とは最も厳正なる批評家をも欺き、彼が系統の誤謬をも悉く許して咎めざらしむるなり、されど熱心なる日本画崇拜家が此の謬誤を却て模範となすは固より非なり〕という。

さらに日本絵画の〔佳良なる製作を觀るに、個々の欠点は直に指べし、欧洲の学校に在りて、技術の研究をなしたるものは、容易に此の誤謬を見出し容易に之を改作するを得べし〕と西欧の先進優位の意識が露出する。

〔眞の美術家が彼を觀れば大学の哲学の世界理屈の外に在る所の一異物を認む、此の異物は科学なる解剖学の如きは嘲りて近づけず、不完全なる器械力が天才の動力の為に導かれるの証拠を与ふべし〕〔彼が歐州画工に就て学ぶべき事の少なからぬが如く、我歐州画工の彼に従ひ別に学ぶべき伎倆亦實に少なからざるなり〕とあり、当時のジャポニズムの影を看取できる。

ウィリアム・アンダーソン<sup>4</sup>の（The pictorial arts of Japan）を持出し、日本絵画を「真美術」の産物としない一派と日本絵画を妄想せる一派の中間にアンダーソンを位置づけ、〔公平の批評は、不偏・不党家の鑑識

家にあらざれば決して下す可からざるなり)と結論する。

「ドクトル、ハ、ギルケー」<sup>5</sup>と「アンダーソン」によって、歐州人は日本画術の歴史概要、発達及意味の弁論を吸收できた、とプリンクマンは考え、「ギルケー」が早世し、「日本画道の歴史」が著述できなかつたと残念がつている。

プリンクマンは、アンダーソンが大英博物館に目録書を作成し、〔日本美術の歴史を研究せんと欲する人々の為めに、精確なる指南車たるを得たるものなり〕とし、〔人種学上の智識のみならず、美学上の価値を解するを得しめたる偉功は、蓋し佛人のロイス・ゴンゼー氏ならん〕といい、ゴンスの背後には若井兼三郎がいたことを指摘する。若井に就いて、重麗は〔ワカ井(若井?)君の補助を得たこと少からず〕とし、起立商工会社を創設に参画していた骨董商の若井兼三郎の業績を重麗が知らなかつた。

〔ワカ井君は自国の美術歴史に至て遼き人にして、ゴンゼー氏の著作を助け唯だ歴史上の材料を補助したるのみならず得易からざる祖国の美術品を貸与し、以て大画伯の作を熟覧するを得しめたり〕とプリンクマンは記述し、ゴンスと若井の日本美術理解に反論するフェノロサを挙げ、その論文<sup>6</sup>を引き合いに出す。

重麗は、〔日本画通を以て任ずと雖も、未だ其説は悉く信ずるの価値あらざるなり〕とするが、〔外人を以て深く他国の美術界に足を投じ穿鑿に全幅の力を余さず、自家の見識を以て一説を立つ、敬服せんばある可からず〕とフェノロサを認める。

(二種の厳正なる疑念無き能はざるべし、一はフェノロサア氏がホクサイ(北斎)及其門弟を評して極めて貶低したこと、即ち氏は恰もコル子ル派<sup>7</sup>の人が、酷なる觀察を下

して、今日の主実的新画工を其前に於て誹謗したるが如きことはなり、而して亦一は氏の批評眼の政治上の潮流に捲かれたるが如く見ゆることはなり、……中略……徳川將軍の政治を執れる間に遂げたる華麗なる美術の発達をさるものとせず頭を回して王政の数百年間長夜の睡の覚ざりし時代より更に古代の盛運を挽き回さんと欲するものなり、……中略……フェノロサアは實に第十九世紀の日本の美術に対して、彼れ自ら昔し京都に在りし古朝廷の貴人の如く想へりしが如し]と批判するプリンクマンの意図の背後に歐州人と米国人という対立構造が読み取れる。

#### 注

- 1 『ドイツにおける〈日本=像〉』クラウディア・デランク、水藤龍彦・池田祐子訳(思文閣出版 2004・7・22)
- 2 「想」の原語は(Das Ideal des japanischen Malers)のDas Idealにある。
- 3 アルバート・ボイム「19世紀のアカデミーと仏蘭西絵画」参照。
- 4 アンダーソン: William Anderson Descriptive and historical Catalogue of a Collection of Japanese and Chinese Paintings in the British Museum, Londres, 1886
- 5 H. Gierk『資料御雇外国人』小学館1975  
「ギールケ・ハンス Gierke, Hans 独, 1847 /8/1~? M10~13東京医学校・東京大学医学部解剖学教授、ウルツブルヒ大学の解剖学及び組織学教師。
- 6 Review of the chapter on painting in L'art Japonais by L Gonse.
- 7 意味不詳